

各関係機関団体の長
各病虫害防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成19年度病虫害発生予報第1号(4月)について

このことについて、病虫害発生予報第1号を発表したので送付します。

予報第1号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生時期 (予想)	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	平年比	前年比
麦類	赤かび病	早	-	並	並
かんきつ	かいよう病	-	並	やや多	並
	ミカンハダニ	-	やや多	やや多	やや多
なし	黒星病	早	-	やや多	並
かき	フジコナカイガラムシ	-	-	並	並
茶	カンザワハダニ	-	並	並	やや多
冬春イチゴ	ハダニ類	-	多	多	やや多
	アザミウマ類	-	-	-	多
冬春ナス	ミナミキイロアザミウマ	-	やや多	やや多	やや多
冬春キュウリ	うどんこ病	-	やや多	やや多	やや多

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

天気は平年と同様に数日の周期で変わりますが、一時ぐずつく時期もあるでしょう。

気温は平年より高いでしょう。降水量は平年並、日照時間は少ないでしょう。

週別の気温は、1週目は高く、2週目は平年並、3～4週目は平年並が高いでしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	30	30	40
降水量	30	40	30
日照時間	40	30	30

(福岡管区気象台 平成19年3月30日発表抜粋)

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作】

1 麦類の赤かび病

(1) 予報の内容

発生時期：平年より早い

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並である。（±）

イ 麦類の生育が早まっており、今後気温が平年並で経過した場合、出穂期は小麦、大麦ともに平年より7～9日程度早くなると予想されている。

参考：農業総合試験場における作況調査から予想される出穂期

シロガネコムギ（11月20日播） 4月 1日（平年4月10日）

チクゴイズミ（11月21日播） 4月 5日（平年4月12日）

ニシノチカラ（11月24日播） 3月28日（平年4月 5日）

アサカゴールド（11月24日播） 4月 4日（平年4月11日）

(3) 防除上の注意

ア 最も病原菌に感染しやすい時期は開花期である。

防除適期は、小麦では出穂後7～10日頃の開花期、大麦では出穂後1～4日頃の穂揃い期（ほ場の約80%の茎が出穂した時期）である。

イ 防除適期を過ぎると防除効果が低下するので、防除適期を失わない様に各ほ場の生育状況の把握に努める。

ウ 降雨や曇天が続き多発が予想される場合は、1週間後にもう一度2回目の防除を行う。

エ 降雨の合間に薬剤防除を行う場合、液剤は散布後一旦乾けば降雨があっても薬剤の効果はある。しかし、粉剤の場合は、散布後6時間以内に降雨があった場合は薬剤の効果が落ちるため、天候に留意する。

オ 防除薬剤は「平成19年度普通作病虫害・雑草防除の手引き」を参照する。

カ 農薬散布時には、飛散防止対策を徹底する。

【果樹】

1 かんきつかいよう病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果（±）

発病葉率 0.9%（平年0.5%、前年1.1%）

発生ほ場率 30.8%（平年10.4%、前年25.0%）

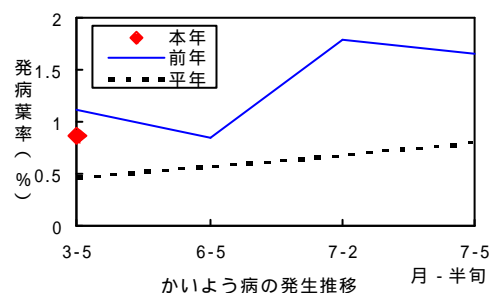
イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並である。（±）

(3) 防除上の注意

ア 発病葉枝は伝染源となるので除去し、園外に処分する。

イ 新葉への感染がみられた場合は、果実への感染も多くなるので、開花前後の防除を徹底する。

ウ 生育が早まっており、発芽後に防除する場合は、薬害に注意する。



2 かんきつのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

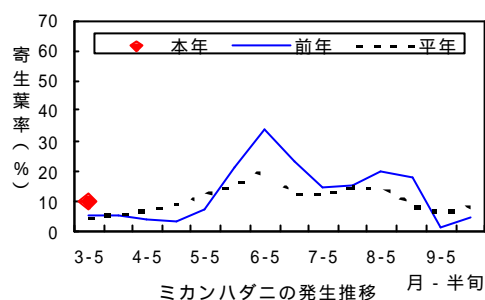
(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果(+)

寄生葉率 10.2% (平年 4.4%、前年 5.3%)

発生ほ場率 53.8% (平年35.5%、前年43.8%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並である。(+)



3 なし黒星病

(1) 予報の内容

発生時期：平年より早い

発生量：平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

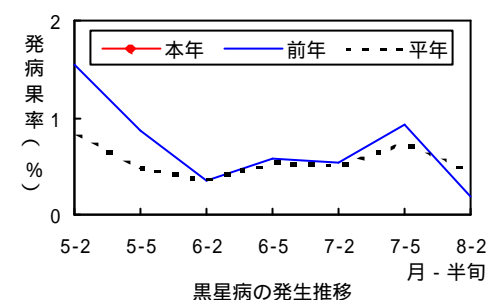
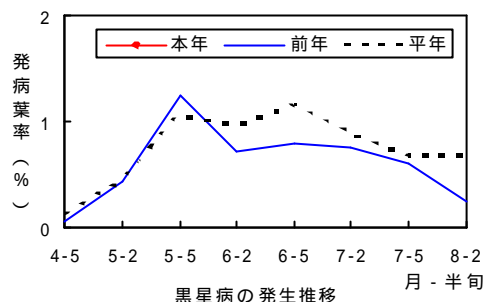
ア 前年は4月5半旬に発生を確認し、以降発生は平年より多く県内各地で発生がみられ越冬菌量が多いと思われる。(+) イ 豊水の開花は平年より8日程度早い。(農業総合試験場調べ)

ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並である。(±)

(3) 防除上の注意

ア 薬剤防除は、本病に対して最も感受性が高い開花直前から開花後2週間までに徹底する。本年は、開花時期が早まっており、防除適期を失しないように注意する。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



4 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 前年の10月2半旬調査結果(±)

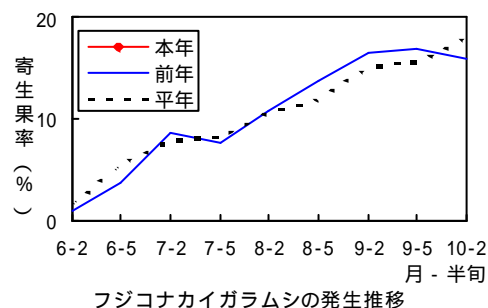
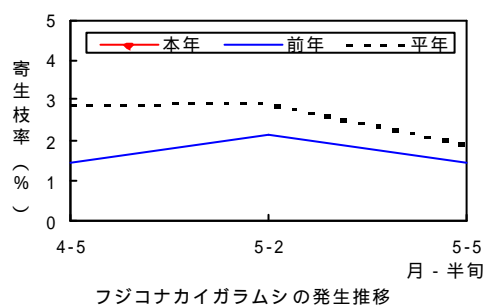
寄生果率 16.0% (平年17.3%、前年17.3%)

発生ほ場率93.8% (平年81.0%、前年94.1%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並である。(+) ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並である。(±)

(3) 防除上の注意

越冬幼虫の新梢への移動時期から薬剤防除を徹底する。



【果樹・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かんきつ そうか病	並	並	並	・発芽直後～展葉期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。 ・罹病葉は伝染源になるので除去する。
ぶどう 黒とう病	-	並	並	・頂芽の展葉2～3枚期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。 ・罹病枝や前年取り残した巻きひげは除去する。
果樹カメムシ類	- -	県全体 並 朝倉農林 管内 やや多	やや少 並	・県全体では、越冬量は平年並であったが、朝倉農林管内等のやや多い地域では、モモ、ウメ、スモモ等への飛来に注意する。 (越冬量の詳細は、平成19年2月20日付け「速報第7号」を参照)

【茶】

1 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査結果(±)

寄生葉率 2.6%(平年 2.6%、前年3.7%)

50葉当たり虫数 2.2頭(平年 3.5頭、前年3.2頭)

発生ほ場率 44.0%(前年 57.7%)

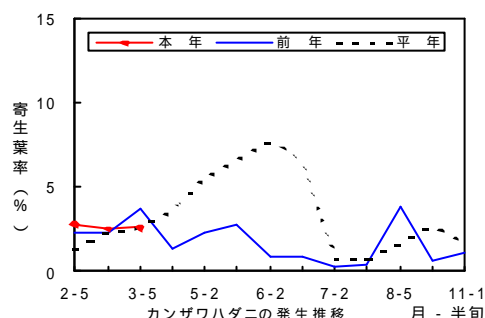
イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並である。(+)

(3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率2%以上の茶園では防除を行う。

イ 霜害発生後は、多発しやすいので早めの防除を行う。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【野菜】

1 冬春イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

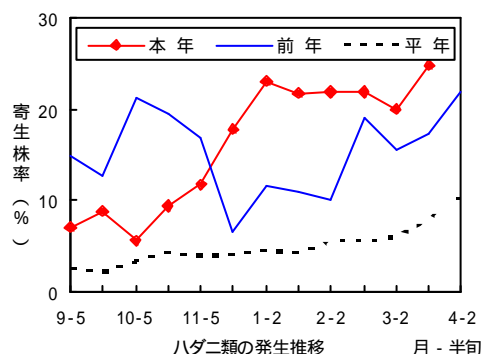
発生量：平年より多く、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果(+)

寄生株率 24.8%(平年 7.9%、前年 17.2%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高い。(+)



(3) 防除上の注意

- ア 依然として発生量が多い状態が続いている。気温の上昇とともに増殖がはやくなるので、防除を徹底し密度の低下を図る。
- イ 多発ほ場では、薬剤を7～10日間隔で連続して2～3回散布する。その際、葉裏に薬剤がよくかかるように丁寧に散布する。なお、摘葉後に行うと効果的である。
- ウ 薬剤感受性の低下がみられる地域においては、平成19年度野菜病害虫・雑草防除の手引きの「イチゴにおけるナミハダニの薬剤感受性検定結果(40～41頁)」を参照し、薬剤を選定する。なお、効果が高い薬剤でも、多発生時には密度を抑えることが困難となるので、早めに防除を行う。
- エ 除草や葉かき後の残渣にハダニ類が寄生している恐れがあるので、ほ場内には放置せず、ビニル袋に入れ密封して処分する。
- オ 薬剤によっては天敵等への影響があるので、薬剤の選定には注意する。

2 冬春イチゴのアザミウマ類

(1) 予報の内容

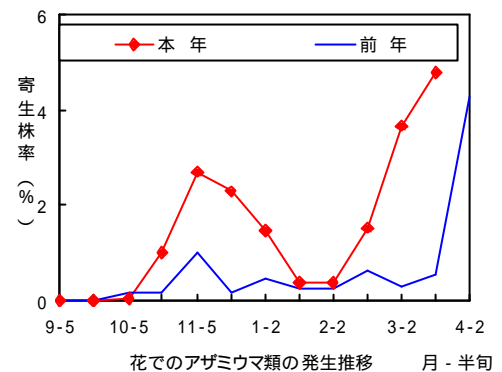
発生量：前年より多い

(2) 予報の根拠

- ア 3月5半旬調査の結果(+)
寄生株率 4.8% (前年 0.5%)
- イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高い。(+)

(3) 防除上の注意

- ア 花への寄生が見られたら早急に防除を行う。
なお、花に軽く息を吹きかけると成虫が飛び出し、発生が確認できる。
- イ 気温の上昇とともに増殖がはやくなるため、防除を徹底し密度の低下を図る。
- ウ 薬剤によっては天敵等への影響があるので、薬剤の選定には注意する。



3 冬春ナスのミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

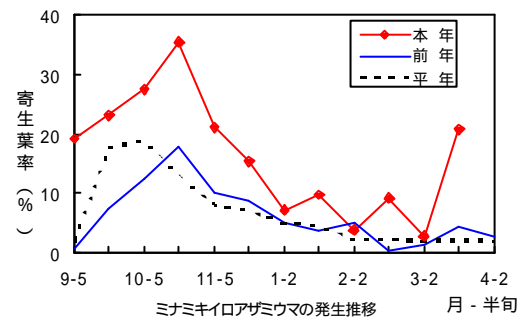
(2) 予報の根拠

- ア 3月5半旬調査の結果(+)
寄生葉率 20.8% (平年 2.1%、前年 4.5%)
防除が不徹底の一部多発ほ場が見られる。
被害果率 0.6% (平年 0.5%、前年 1.4%)
- イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高い。

(+)

(3) 防除上の注意

- ア 気温の上昇とともに増殖がはやくなるため、防除を徹底し密度の低下を図る。
- イ マルハナバチを放飼する場合は、薬剤によっては影響があるので薬剤の選定には注意する。
- ウ 防除対策については、平成18年11月13日付け「速報第6号」を参照のこと。



4 冬春キュウリうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査結果(+)

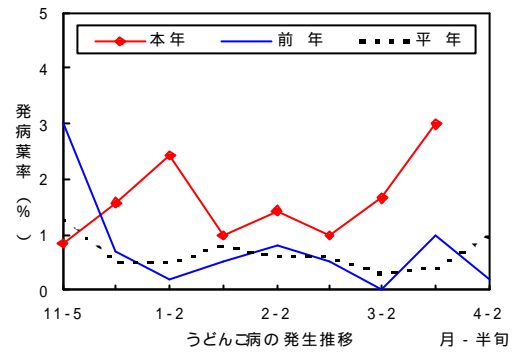
発病葉率 3.0% (平年 0.4%、前年 1.0%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並である。(±)

(3) 防除上の注意

ア 換気を良くし、通風を図る。

イ 昼夜の温度差が大きくなると発病が多くなるので注意する。



【野菜・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
冬春イチゴ 灰色かび病 うどんこ病	やや少 並	やや少 並	やや少 並	・ハウス内が多湿にならないように換気を図る。 ・病勢が進展してからでは防除が困難となるので、発病初期に防除を徹底する。
冬春ナス うどんこ病 灰色かび病 すすかび病	並 やや少 やや少	並 並 やや少	並 並 並	・ハウス内が多湿にならないように換気を図る。 ・病勢が進展してからでは防除が困難となるので、発病初期に防除を徹底する。 ・樹勢が低下すると発病が助長されるので適正な肥培管理に努める。
冬春トマト 灰色かび病 葉かび病	やや少 並	やや少 並	やや少 並	・ハウス内が多湿にならないように換気を図る。 ・病勢が進展してからでは防除が困難となるので、発病初期に防除を徹底する。
冬春キュウリ べと病 灰色かび病	やや少 並	やや少 並	並 並	・ハウス内が多湿にならないように換気を図る。 ・病勢が進展してからでは防除が困難なので、発病初期に防除を徹底する。
野菜共通 コジリ類	並	並	並	・気温の上昇とともに増殖がはやくなるため、防除を徹底し密度の低下を図る。 ・黄色粘着テープを設置し、発生状況の把握に努める。

農薬の適正使用、飛散防止の徹底を！

全ての農薬の残留基準が作物毎に設定され基準値を超えた食品（農産物）の販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう、これまで以上に注意を払う必要があります。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数を使用基準を遵守する。

動力噴霧器、薬液タンクなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 生産履歴の記帳

農薬使用の際は、作物、ほ場毎、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を記帳する。

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpnp.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jpnp.ne.jp